

三つ子の魂百まで

大場 義夫

東京大学・獨協大学名誉教授

「三つ子（昔は数えていうから満2歳児）の魂百まで」というが、人の性格は幼児時代に大体決まり、成長してからは容易に変わらない。では、その性格は誰によってつくられるか。いうまでもなく、最も親しく最も長時間子どもに接する母親の責任が重大である。

その教育のポイントを小児保健の権威、内藤寿七郎先生（愛育病院名誉院長）が「私としても職を辞めてから本当にわかったこと」と前置きして話されたことがある。

① 2歳代は将来を決める最も大切な時期である。

母親は、この時期、子どもを自分の思うようにしようとあせってはいけない。叱ったり叩いたりしてはいけない。全ての愛情を出し切って子どもに接する。

② 3歳代は「模倣の時代」のさなかである。子どもは何でも大人のまねをする。したがって、母親が正しい行動をしなければならない。

③ 4歳代になれば、理屈がわかるので命令や禁止をしてもよい。しかし、頻発しても効果はない。2～3週間たっても変わらなかったら改めて叱る。また、カッカしている時に叱ってはいけない。一呼吸おいて冷静になってから叱る。夫婦喧嘩のトバッチリで叱るなどものほかである。

小児保健関係者による育児のシンポジウムでも「勤めを持つ母親に産後3年間の有給休暇」が真剣に論じられたことがあるが、筆者は「子どもを持つ母親は家庭に戻れ」といいたいほどである。

以上は性格形成全般についての話であるが、社会のルールは必ず守り、他人を思いやり、「どうぞ」「すみません」「ありがとう」が素直にいえるなど、よき交通社会人（歩行者としても運転者としても）に必要な「こころ」は大体この時代に出来上がってしまう。ちなみに、よく事故を起こすタクシー運転者に関する米国の調

査でも、彼らに認められた特徴の一つに、親がいないか、両親が不和な家庭で子ども時代を過ごした者が多いことがあげられている。子どもの教育のためにも、家庭は両親がそろって円満であることが大切である。

我々は子ども時代に日本語の会話をほぼマスターしてしまうが、中学生になってからの英会話は容易に上達しない。これと同様に「こころ」だけでなく、よき交通社会人としての全ての基礎は子ども時代（幼児時代と限定はしないが）につくられてしまうのではなからうか。18歳になってから来る教習所では交通規則や運転技術を教えるのがやっとなで、性格を変えるなどは時間的にも無理だが、年齢的に不可能である。

筆者の偏見かもしれないが、交通安全3E対策のうち、実施すればすぐ効果が現われる工学、取締に比べ、効果の現われにくい教育は従来冷飯を食わされてきた感がする。しかし、前二者の効果はその時その場を通る人にしか及ばないが、教育

の効果は長く続く。そして、交通安全教育は、世間一般に考えられている教育だけでなく、既述のごとく根本的には立派な人間をつくるという「人間教育」から始められなければならない。しかも、この教育は子ども時代に大に行われなければならない。交通安全教育のためにも、母親（あるいはそれに代る者）にこの意味での理解と行動を求めべく一大キャンペーンを行うべきではないか。「百年河清を待つ」というが、この教育が徹底してこそ、彼らが大人になった時に初めて「よき交通社会」、さらにいえば「よき社会」が実現するのではないか。

